

TS転生して冒険者に！！

磯山ゲル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

事故にあいそうな小学生を助けて死んでしまった如月真也は異世界へと転生してしまう。

——女の子として

今後どうなっていくかは作者にもわからない!?
そんなこんなでグダグダ進めていくぜいっ!

目次

さて、転生です	1
さて、冒険者です。	4
さて、ピンチです (前編)	10

さて、転生です

「だからさあ…、転生って最高だと思うのよ俺は！異世界でハーレム作って毎日良い思いしたいわ。」

隣の机でキーボードに指を走らせながら転生の良さを1時間ほど話しているのは友人の山崎優斗だ。

ちなみに俺は如月真也だ。オタクであり優斗とともに毎日忙しく過ごしているごくごく普通のサラリーマンである。

「まあ、異世界転生いいよな。俺は魔法とか使ってみたいわ。」

…訂正しよう。毎日だらだら仕事をしているごくごく普通のサラリーマンだった。当然この後上司にこっぴどく叱られましたハイ。

「今日も疲れたなー、帰りにどつかよってくか？」

「いや、今日はまっすぐ帰りたいわ。腰痛いし。」

ええー。と優斗は文句を言いつつも一緒に帰路についてくれる。

しばらく歩いてあと少しで住んでいるアパートに着くといったところだっただろうか。

塾帰りの小学生が交差点を渡っている。

そこへトラックが猛スピードで迫っていた。俺は迷わず駆け出していた。小学生もトラックに気付いたが腰が抜けてしまったのかその場に座り込んでしまった。

「真也あああ。」

俺は小学生を持ち上げ優斗に向かって小学生を投げた。

当然反動で俺はその場で尻もちをついてしまうわけで…、

トラックがもう目と鼻の先にあった。

こう死ぬ間際の瞬間って時間が止まったように感じるとかアニメとかでやってたけど、まさにその通りで最後に俺はいつも一緒に居た親友の顔を見ることができた。

そして、最後の言葉を口にする。

——「頼んだぜ、親ゆ——」。

そして俺の人生は終わった。

「ミーちゃん、ぼけっとしてるけどどうしたの？」

赤色の髪を両サイドで束ねた少女が俺の顔を覗き込んでくる。

「何でもないよ、アイシヤ。」

俺は彼女の頭を優しくなでてあげる。そうすると彼女は気持ちよさそうに目をつむる。

そう！転生してしまったのである！異・世・界に！

俺はこの世界のカルデリア公国の端にある村シャーナで生まれた。シャーナは森に囲まれた村だ。

今俺と隣に座っている美少女アイシヤは馬車に乗ってカルデリア公国首都ダイナドラへ向かっている。

なぜ？冒険者になって世界を旅するためだ。俺とアイシヤは今年で15になり成人したのでちっちゃいころからの夢である。冒険者になることを叶えに行く途中なのだ。

因みにこの世界についてももう少し詳しく説明しておく、この世界には魔物や魔法などのファンタジーが存在している。そして俺は村でもずば抜けた魔力を持つ魔法使いなのだ。

…この世界の説明じゃなかったね…ごめん。テンション上がったちゃってさ。

俺たちみたいに冒険者になりたい奴はまず大きな町へと行って冒険者ギルドで冒険者登録をする必要がある。

冒険者はランクがEからSランクまである。Sランクとかは伝説の存在とかなんとか。よく昔話に出てきたりするほど強いやつらなのだ（小並感）。

「ミーちゃん、もつとお…」

いかんいかん、アイシヤの頭を撫でるのを中断してしまっていた。アイシヤが子猫のようにすり寄ってきて可愛い。この世界に転生できて本当に良かった。

：ただまあ、問題が一つあるんだけどね。まさかとは思ったよ、びっくりしたよ、今ではもう慣れたけどさ…。

俺は…

「お嬢ちゃんたちー、もうすぐダイナドラに着くぜー」

俺、ミーナ・シンシアは、

俗にいうTS転生をしてしまったのだ。

さて、冒険者です。

「それじゃあ、俺の目的地は別の街だから。お嬢ちゃんたちみたいなかわいい子たちは色々と気を付けるんだぞ。」

街の門の前で、馬車のおじさんがそう言っつて馬車を走らせて去つていく。

「おじさんも道中気を付けてくださいねー。」

と俺。

「ばいばい。」

とアイシャ。

俺たち二人は去つていく馬車が見えなくなるまで手を振り続けた。

：だつて、ダイナドラへ歩きで向かつてるところに通るかかったおじさんが「街まで乗つていくかい？」なんて言つて、ここまで運んでくれたんだから美少女二人にずつと見送つてもらえるなんてご褒美があつてもいいと思うのだ。

：美少女二人？アイシャだけじゃないのかつて？馬鹿野郎！俺も容姿はいい方だぞ。

身長は160位で高くもなく低くもないちょうどいいサイズ。出てるところは出てるし引つ込むところは引つ込んでいる。

髪の色は空にも負けないぐらいの青、：ちよつと水色っぽいかな？腰よりも下の位置にある髪を三つ編みにしている。

：あとは、えーつと：あつ！ちゃんとスカートはミニでございます！ちよつとスースーするけど美少女×魔法使いⅡミニスカ+ローブだと思つているからな。当然だ。

「さて、じゃあ行こうか。」

「行こうかー。」

手をつなぎダイナドラ内へと入つていく。

「うわっ、やっぱり首都は違うね！建物がこんなにいいーっぱいあるんだ！」

俺の隣でアイシヤがはしゃいでいる。

それもそうだ、俺たちが歩いている大通りの周りは石造りの3階建てぐらいの建物で囲まれている。因みにこの大通りはダイナドラ中心部であるカルデリア城へと続いている。

——まあ、何が言いたいのかというとはしゃいでるアイシヤを見てると癒される。

——そして、今俺たちは冒険者ギルドの前にいる。

え？いきなり話がとんだって？気にすんな何もなかったんだ。

「やっぱり緊張するねミーちゃん。」

微笑みながらアイシヤが俺の顔を覗き込んでくる。

「…そうだね。」

「行こうか。」

アイシヤの手を引き扉を開けて冒険者ギルドへと足を踏み入れる。

中はテーブルがいくつか並んでいて、昼間からお酒を飲んでいる人がいたり。掲示板があつて鎧を着た冒険者たちが依頼を見ていたり。

そうしてギルド内をぐるっと見渡すと掲示板の横にある階段を挟んで受付らしき場所を発見し、そこへ向かった。

「ここは受付であつていますか？」

「はい、あつていますよ。本日はどんな御用ですか？」

カウンターに立っている眼鏡をかけた黒髪ぱつっんの美人さんに声をかけると美人さんは笑顔で受け答えしてくれる。

「私とこの子の冒険者登録をしたいのですが…。」

そう言つて俺とアイシヤは隣に並ぶ。

「わかりました。では冒険者登録の前に簡単に説明だけさせてもらいますね。因みに私はルキナ・メルウエルと言います。冒険者さんのサポートをしていますので、困ったときとかは遠慮なくおっしゃってくださいね。」

そう言つてウインクをする。それを見て俺は、

——この人のファン多そうだなあ。ギルドのアイドル的な存在っぽいなあ。

とか考えていた。

「では、冒険者ですがランクは下からE・D・C・B・A・Sとあります。最初は皆さんEランク冒険者としてスタートし依頼をこなしていただきます。そして、ギルドが上のランクに上がる実があると判断した方は上のランクへと上がることが出来、より難易度の高い依頼をうけられるようになります。」

難易度の高い依頼は当然危険度も高いですが報酬も高くなるので頑張つて上を目指してみてください。それと実力のある冒険者はギルドから二つ名をもらうことができます。」

「二つ名?」

つい疑問に思いついてしまった。

「はい、例えば『剛腕』や『鬼殺し』、『破碎槍』など様々な方がいます。まあ、どんな方かは会ってみればわかります。二つ名持ちの方は大体がBランク以上の冒険者さんですね。」

という。

——二つ名はBランク以上か…、頑張つて良い二つ名をもらいたいな。

「それでは、こちらが冒険者の証のカードです。失くした場合は再発行に銀貨一枚かかってしまうのでお気を付けてください。依頼の達成時には、この受付に冒険者カードを持ってきていただければ依頼達成の報酬をお渡しできます。失くすと再発行するまで依頼達成の証明もできなくなってしまうので、本当に気を付けてくださいね。」

お姉さん：ルキナさんは細かく冒険者について教えてくれた。

そして俺とアイシヤは冒険者カードをもらいあっさり冒険者になった。

「それじゃあ、依頼を受けてみる?」

アイシヤに聞くと、

「うーん、ちよつと疲れてるけどミーちゃんは今すぐ行ききたそうな顔

してるから行く！」

「え？そんな顔してたかな？」

そんなに表情に出るタイプだったか俺？

「ミーちゃんとどれだけずーっと一緒に居ると思ってるのー？わかるよー。」

ニシシと笑うアイシャ。——でもさ…

「うわっ、やばいなにあれ可愛い。」

「俺ちよつと声かけてこようかな。」

「デュフフフフフフ。」

「デュフ？デュフデュフ。」

周りの冒険者たちが見てるからやめてほしいなー。

最後の二人なんてなんか変な言葉で話してるし…。

俺とアイシャは掲示板の前で依頼を探している。

因みに掲示板は冒険者のランクごと違うのでどの掲示板を見ているかで大体のランクがわかってしまう。

——だから

「ねえねえ、お嬢さんたち見たところ駆け出しでしょー？俺らと一緒にCランクの依頼うけてみないー？」

いかにもチャラついているような連中四人に誘われてしまっている。

まあ、こんな美少女をほっとくわけがないよね普通。

「いえ、私たち最初の依頼は二人で始めたいと思ってるのでごめんなさい…。」

やんわりと断っておく、

「えーいいじゃん。そんな低ランクの依頼受けるより、俺らと一緒に行ったほうがランクすぐにあげられるし経験もつめるぜ。何かあったら守ってやるからさあ。」

ニヤニヤと薄気味悪い笑みを浮かべそう言ってくる。…こいつは言葉を通じないのだろうか？最初の依頼は二人で受けたいと言っているのに。

まあ、最初じゃなくとも断るだろうけどね。

「おーい、聞いてるー?」

そういつてチャラ男が俺に手を伸ばす。

——が、その手は誰かにつかまれて動かない。

掴んだ手の先を見てみると、俺と同じくらいの黒髪の青年がいた。大剣を背負っていることから見てたぶん剣士だろう。

『地砕き』のウォルフ!」

チャラ男の取り巻きのチャラ男…ええい、わかりづらいからチャラ男Bでいいや!

チャラ男Bが彼を見て驚いたように名前を呼ぶ。

彼は二つ名持ちなのか…。

「彼女らが困っているじゃないか。おとなしく君らは君らの依頼に行けばいい。」

そう彼…ウォルフが言うときチャラーズは舌打ちをしてギルドを出て行った。

「大丈夫かい?彼らはよく新人に手を出したりしているんだ。こちらも注意はしているんだがやめてくれなくてな…。」

チャラーズがギルドを出ていくのを確認するとウォルフは私たちのほうを向いた。

「助けていただいてありがとうございます。」

そう俺が言っ頭を下げる。

「いや、いいよ。当然のことをしたまでだ。それよりも初の依頼なんだろう?日が暮れる前に行ったほうがいいよ。暗くなると魔物もより凶暴になるからね。」

「はい、ありがとうございます。」

俺とアイシャは再び頭を下げて掲示板から依頼の紙をもってカウンターで依頼を受注する旨を伝えギルドを出る。

初めての依頼は『角ウサギの討伐』だ。

角ウサギは草食ではあるが頭に生えた角はとても鋭利で冒険者見習いでよく被害者が出ているらしい。それに、縄張り意識がとても高く自分の縄張りに入ってきたものに容赦なく突進してくるものだから道の近くに出たときはこうして依頼が出る。

村にいたときにアイシヤとお小遣い稼ぎとしてよく狩った相手でもある。当然楽勝ではあるが、ほかに討伐系の依頼がなかったためにこれにした。

慣れたことをしに行くだけだが冒険者としては初めての依頼にドキドキしながら私とアイシヤは城門の外へと出ていくのだった。

さて、ピンチです（前編）

「せええええいー！」

アイシャが角ウサギの腹部に短剣を突き刺す。彼女の武器は短剣である。

短剣が刺さった角ウサギは数秒後に息を引き取る。

ここは街道沿いの草原だ。街道からこの草原を挟んで森がある。森には凶暴な魔物が住み着いており危険であるためむやみに近づかないのが鉄則だ。

因みに森からこの草原までの距離は大体1kmぐらいだろうか、遠いようで意外と近い。

「うん、これで依頼の20頭討伐したね。」

俺が12頭、アイシャが8頭討伐した。…え？戦闘描写がない？だって俺は魔法を唱えただけだし、アイシャは短剣をさつきみたいに突き刺すだけの単純な作業だよ？勿論命かかってるけどね。

空が少しばかりオレンジ色に染まり始めたところに俺たちの依頼は完了した。

「じゃあ、角ウサギの角を剥ぎ取って帰ろうか。」

アイシャはうんと言い、自分の近くにある角ウサギの角の根元に刃を突き立てた。

俺も、近くの角ウサギから剥ぎ取り始める。前世では血を見るだけでも駄目だった俺だけど、この世界に生れ落ちてからはそんな事も言ってもらえず、こういった作業をもう何回もしてきて慣れてしまっている。

俺とアイシャはそれぞれ角ウサギの角を次元ポーチに詰める。因みに次元ポーチは魔法の力でいろんなものをしまえる魔法のポーチである。…決して○次元ポケットではない。

そして、空が全体的にオレンジに染まったところに帰路に着いた。この草原までは街から2時間ほど馬を走らせる距離だった。

ここまで歩いて来ようとしていたら、また知らない商人のおじさん

が「通り道だから乗っけてつてやるよ。」とのことで送ってもらった。ありがとう知らない商人のおじさんたち。

そんなことで、今は歩いて帰っているがおそらく街に着くのは夜遅くになってしまいうだろう、もしかしたら野営も考えなくてはならないかもしれない…。

そんな事を考えていた時だった。

「うあああああああああああああ」

遠くから叫び声が聞こえた。

「アイシャ、聞こえた?!」

「うん!多分森のほうだよ。…あつ!あそこ!」

そうアイシャが言っ指をさす、その先には今朝俺たちに絡んできたチャラーズの一人が走って森から出てきていた。…何かから逃げるようにして。

チャラーズの一人は街道に居る俺たちに気付き手を伸ばす。

「助け———」。

そして、俺たちが動き出す前に森から出てきた大蛇の口の中に消えた。

「———あれは、ポイズンスネーク!?」

俺はチャラー男を飲み込んだ魔物の名前をいう。10歳以下のころは魔法の鍛錬よりもこの世界のことをよく知ろうと村にある本を読みあさっていた。その中でも一番繰り返し読んだのは『魔物図鑑』だ。魔物と呼ばれる事のない小さい生物から伝説級の魔物の伝承まで書いてある本である。

ポイズンスネークのページだつて当然読んだ。体長は大体2メートルでCランクに設定されていた。しかし草原の向こうにいるポイズンスネークの体長は7メートルを超えている。

それに、ポイズンスネークの後ろの森の木々が揺れている。まだほかに魔物が潜んでいるのだろう。

「あの大ききさじゃあBランク…、最悪Aに届いてるかも…」。

アイシャ!ポイズンスネークはこつちに気付いてる。私があいつ

の気を引くから街まで行つてこのことを冒険者ギルドに伝えて。」

「嫌だよ！ミーちゃんが戦うなら私も戦う！」

アイシヤはそう言う。そう言つてくれるのは知っていた。

とてもうれしい、でも…。

「それはダメだよ。…いい？二人がちゃんと助かる方法がそれなの。アイシヤなら急げば半刻で街まで付くでしょ？私はそんなに早く走れないし、今あいつを放つておくと必ずどこかで大きな被害が出ちゃうの。…だから、ね？」

そう言つてアイシヤの方を見る。アイシヤは少し泣いていた。

「ミーちゃんがそう言うならそうするよ…。でも！絶対死なないですよ！初めての依頼で死んじやうなんて私許さないからね！」

俺はポンとアイシヤの頭に手を置く。

「大丈夫、私が強いアイシヤだつて知つてるでしょ？何とか持ちこたえておくから。街に戻つたらおいしいもの食べようね。さあ行つて！」

頭に置いていた手でアイシヤの背中を軽くたたくとアイシヤは走り出した。アイシヤは村で一番動きが速かった、持久力もある。彼女ならしつかりと援軍を連れてきてくれるだろう。

「さて…。」

俺はポイズンスネークに向き直る。奴はもう草原の中間地点ぐらゐまで来ており、後ろの森からはゴブリンや群狼などが出てきている。

ゴブリンはDランクの魔物だがCランクの冒険者でもたまたまに足をすくわれることがあるらしい。

群狼は名前の通り群れで獲物を襲う。単体でのランクはDだが群れの規模によつてランクが変わる。

「あれはBランク行くんじゃないかなあ…。」

そんなことを呑気に考えてしまう。森から出てきた魔物は巨大ポイズンスネーク…Bランクぐらい、ゴブリン20体、群狼40頭だ。

…怖い。まさかこれほどまでにいるとは思わなかった。

「まあ、でもやらなきゃいけないもんな。アイシヤとの約束も守らな

きやいけないし。」

そう口に出し杖をかざす。——最初に狙うのは足の速い群狼。「その槍、大地を切り裂き、我が敵の刻を凍らせたまえ——」フロスト・ランス！」

素早く詠唱する。俺の周りには30センチほどの氷の槍が20本ほど浮いている。杖を振り下ろすとそれらは群狼へと向かって飛んでいき、氷の槍に貫かれた群狼は氷となって動かなくなり、近くにいた別の群狼も凍り付く。

——フロスト・ランスは俺が編み出した魔術だ。槍の当たった対象を凍らせ1メートル以内にいる別の生き物も冷気によつて凍らせる対軍魔法。

群狼の数を30減らすことができ、ゴブリンにも少なからず被害が出ている。

「あれ…?」

ポイズンスネークの姿が見当たらない。あれほどの巨体から目を離していないはずなのに…、

そう考えていると、地面が揺れた。

「下?!」

俺は瞬時に後ろに跳ぶ。その数秒後に俺のいた場所にポイズンスネークが地面を割つて飛び出してきた。

「少しでも気付くのが遅かったら危なかったな…。」

そうして改めてポイズンスネークと対峙する。距離として5メートルしか離れていない。

…大きい。

「フレアボール!」

杖から火球が数発出て、そのうちのいくつかは奴の体にあたる。紫色をした奴の鱗が少しばかり焦げただけで終わってしまった。

いくつか避けられた火球はゴブリンの数を減らしたのか奴の後ろから叫び声が聞こえる。

「奴の攻撃を避けながら、魔法で削っていくのか…。それなりの攻撃じゃなきゃ防御抜けなさそうだな。それに他の魔物も気を付けない

といけないなんて…。まあでも、頑張りますか！」
——そして私は、杖を振りかざし生きるために魔法を発動する。